

花が語る

中国の美酒と美文

王敏 著

梅
櫻
叢
書



图书在版编目 (CIP) 数据

中国美酒、美文与花卉：日文 / 王敏著. — 北京：
朝华出版社，2015.12

(梅樱书系)

ISBN 978-7-5054-3461-5

I. ①中… II. ①王… III. ①酒—文化—中国—日文
②民间故事—作品集—中国—日文 ③花卉—文化—中国—
日文 IV. ① TS971 ② I277.3 ③ S68

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2015) 第 309298 号

花が語る中国の美酒と美文 (中国美酒、美文与花卉)

作 者 王 敏

责任编辑 焦雅楠

特约编辑 杨 莉

责任印制 陆竞赢

封面设计 仙境设计

制 作 北京维诺传媒文化有限公司

出版发行 朝华出版社

社 址 北京市西城区百万庄大街 24 号 邮政编码 100037

订购电话 (010) 68413840 68996050

传 真 (010) 88415258 (发行部)

网 址 <http://zhcb.cipg.org.cn>

印 刷 虎彩印艺股份有限公司

经 销 全国新华书店

开 本 787mm × 1092mm 1/32 字 数 135 千字

印 张 6.75

版 次 2016 年 1 月第 1 版 2016 年 1 月第 1 次印刷

装 别 平

书 号 ISBN 978-7-5054-3461-5

定 价 26.00 元

古代、中国では「花」と書かなかった。「はな」の一般的な漢字は「華」であった。植物を表わす「艹」に、美しく垂れ下がった形の「華」。「華」の字は中国の代表的な木、柳の枝と葉の姿から生まれたともされる。日本では、しだれ桜がこの字にピッタリ。藤棚もふさわしい。

「華」の活躍はめざましい。「華大」「華名」「華彩」「華麗」「華美」「華顔」「華容」「華洛」。華やかに展開する。文明が発達し、文化が開け栄える状態をイメージさせる字となり、それは中国そのものを象徴するようになる。「華人」は中国人の自称。外国に居住し中国籍のままの商人や経営人は「華僑」。「華語」は中国語のこと。「中華」は中国そのものである。中国人が自分の国を誇って語るときは、伝説上の理想の国名「夏」と結びつけて「華夏」と書いてきた。

「華」はスケールが大きくなり過ぎた。別の世界を歩きだした。代わって、「華」の字を親に生まれた「花」

が草木の専用字になる。南北朝時代（5～6世紀）であつたらしい。親の字と同じ「艹」を戴いたが、その内容に「化」ける意味が含まれてしまった。四季折々の草木の変貌が「花」誕生の基にあつたのであろう。

「花卉」「花粉」「花紋」「花唇」「花形」「花色」は、さまざまな変化をみせる。人びとは「花信」と「花譜」を読みとり、「花気」「花香」「花様」に酔うのである。「花」のない暮らしは考えられない。「花」は、日本では桜のこと。広い中国では草花を意味するところが多い。「花王」なら牡丹ぼたんで決まり。「花中君子」は蓮である。中国原産の海棠かいどう（バラ科）には「花仙」「花中神仙」の別称を与えてきた。「花」は親の「華」を離れて独り歩きを始める。確固たる地位を占めるのに時間はかからなかった。

花好きの中国人は、古来、競って十大名花を選んできた。時代、地域によって十大名花は異なるが、1987年、全国投票でリストをつくった。詳細は第1話第5章に譲るとして、順に花の名を記すと、梅、牡丹、菊、蘭、月季げつき（庚申こうしんバラ）、杜鵑とけん（ツツジ）、山茶さんちゃ（山茶花さざんか）、蓮けいか、桂花きんもくせい（金木犀）、水仙となる。

中国は漢字の国である。漢詩で花を表現してきた。簡潔明瞭な漢字表現の「花言葉」の花壇がつけられていった。

花中両絶……牡丹、芍薬しゃくやく

園林三宝……木に銀杏いちよう、花に牡丹、草に蘭
 花草四雅……蘭、菊、水仙、菖蒲
 花中四君子……梅、蘭、竹、菊
 盆樹四大家……黄楊つげ、金雀エニシダ、迎春れんぎよう、絨針柏じゆうしんはく
 花間四友……蝶、鶯、燕、蜂

宋代の曾端伯と明代の都卯とうは、友人を花にたとえて描きつつ花を識別したことで知られる。現代に通じる「花十友」は二人の“合作”である。

蘭……芳友
 梅……清友
 ジャスミン
 茉莉……雅友
 ろうばい
 臘梅……奇友
 蓮……浄友
 くちなし
 梔子……禅友
 菊……佳友
 きんもくせい
 桂花……仙友
 かいどう
 海棠……名友
 しやくやく
 芍薬……艶友

宋代で客人、貴賓ちようびんしゆくにたとえたのが、張敏叔。「花十二客」である。

牡丹……賞客

- 梅……請客
菊……寿客
瑞香^{じんちょうげ}……佳客
丁香^{ライラック}……素客
蘭……幽客
蓮……静客
山茶……雅客
桂花……仙客
薔薇^{ばら}……野客
茉莉……遠客
芍薬……近客

張敏叔は12人の「花客」と親しくなったのであろう、詩を1首ずつ書き残した。この“付き合い”ぶりに感銘を受けた後世の画家たちは、たびたび十二客を画題に取り上げている。

十大名花といい、花十友といい、花十二客といい、中国人の花好きを明らかにした。このことは、各地で市の花が制定されていることからもうなずける。

- 牡丹……洛陽
君子蘭……長春
月季……天津、鄭州、南昌^{ていしゅう}
蓮……濟南
菊……開封

ハマナス……ウルムチ

ライラック
丁香……西寧

芙蓉……成都

さざんか
山茶……昆明

梅……蘇州、南京、武漢

さんもちせい
桂花……桂林、杭州

蘭……紹興

ジャスミン
茉莉……福州

デイコ……泉州

水仙……漳州

パンヤ……広州

たくさんの中から選ばれた花たちである。王安石は『ざくろ石榴の詩』で、目にとまった情景を見事に描写した。

ぼんりょく
万緑 叢中に紅一点あり

人を動かす春色は 多きをもち須いず

詩に取り上げ、花の心を詠む。「花品」「花影」「花陰」「花候」「花間」「花界」が描かれる。花が詩に取り上げられるうちに、花文化が成長したようである。『史記』の中の話をもとにできたことわざが花を比喻に使ったが、花の求心力をいみじくも言い当てている。

桃李言わざれども下した おのづか みち自ら蹊を成す

花の美しさを見ようと大勢集まると、木の下に自然と小道ができることをいっている。代表的な花ほど、大勢の注目を集め、歴代の詩人が詠んできた。花文化の様相を深める。古今の言いならわしに、

花朝月夕^{げっせき}

花晨月夕^{かしん}

花朝月夜

春花秋月

がある。朝の、春の花をほめている。夕方の、秋の月と並列したところは、双璧ということのようである。しかし、言外に、夕方の、秋の花がすばらしいとしても……を含んでおり、秋の花をも推薦しているといっていいだろう。数ある花の中から、本書では、桃・桜桃^{おうとう}・菊・桂花（金木犀）を取り上げた。これらの春と秋の代表花を通して、中国文化、中国の心を語ろうとしている。そして中国文化と日本文化の同質性と異質性について可能な限りの指摘を心がけた。実証性を高めるため、古今の漢詩や民間伝承、故事にできる限り頼った。このため一部に資料的に不連続なところがでて、“大胆な”推測を交えつつ展開せざるをえなかった。もともと植物には浅学非才でありながら、難しい分野に取りくんだものと思う。専門の方々のご叱正をお願いしたい。

食文化でもある中国文化は、花をも食文化の例外と

しなかった。まずは試食にも努めながら花文化を味わっていただこう。

さあ、開店です。お席へどうぞ——



目次



プロローグ 花言葉の花壇から	I
第1話 百花盛宴	1
第1章 百花仙子への誘い	3
第2章 百花仙子の失脚	6
第3章 百花仙子の祭日	10
第4章 百花仙子の献身	14
第5章 百花料理	19
第2話 桃美人の美容食	27
第1章 孫悟空の遺言	29
第2章 桃の別天地	35
第3章 桃から生まれた門神	41
第4章 桃色の美人	49
第5章 多彩な桃メニュー	56
第3話 桜嬢の渡日	63
第1章 桜の精の国際交流	65
第2章 桜桃聖食	69
第3章 バラ色の桜桃宴	75
第4章 中国は「桃色」、日本は「桜色」	80
第5章 桜御膳	87



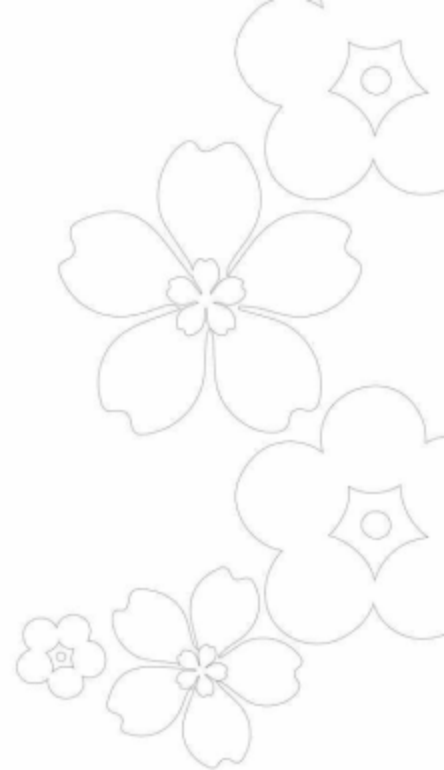


目次



第4話 菊君子の隠逸	93
第1章 重陽花	95
第2章 隠逸花	104
第3章 「老」の黄花	112
第4章 延寿客	121
第5章 夕に秋菊の落英を餐べよう	128
第5話 桂花夫人の色香	137
第1章 猪八戒の初恋	139
第2章 毛沢東の涙	148
第3章 湖よ、桂花酒になれ	158
第4章 清風朗月	171
第5章 桂花宴席	186
エピローグ 百花の百味、百態	195





第 1 話 百花盛宴



第1章 百花仙子への誘い

日本ほど、自然の草木に恵まれた国はない。裸山を見つけることはできない。山火事などで一時的に枯れても、1、2年のうちに緑の山になる。植物の回復に適した雨量があるからだろう。台風も、考えようによっては、恵みの水の“運搬車”になっている。四季の移ろいを植物に教えられることのすばらしさを、日本に来て私は知った。自然の中に人間の営みがある。草木が身近になる。

中国の北方の歴史は過酷な自然との闘いの歴史でもあった。自然に耐える力を持つ樹木に偉大な力をみたようである。古代周の時代、官吏の中で最高位の「公」に就くと、その家は門前に槐えんじゅを植えたという。「卿」の位を許されると棘いばらを植えこみ、標旗ひょうきにした。たまたま選ばれた2本の木が、選ばれた家柄を象徴した。立身出世を願う気持ちは、時代とともに強まる。後の人たちはこぞって、槐や棘を庭に植えるようになってしまった。

役人を嫌う生き方も当然あった。出世を競う生臭い人たちとの交流を避け、悠々自適の隠遁生活をあこが

れるとき、^{にれ}楡の木に思いを託した。晋代の陶淵明（365～427）の詩の世界に起因する。彼は田園にある家を詠んだ。それには軒を覆うように楡の木が育っているさまが描かれていたのである。

樹木に思いを寄せた中国人は、花にはもっと強い思いをゆだねてきた。「花」の字が生まれたのは南北朝時代とされる。「華」が源になっている。「艹」に、変化を意味する「化」が合体した。字としては身軽になったが、使いようは拡大した。

中国人は考えた。花には霊が宿る。生まれつきの妖精のようにみた。「花神」「花仙」「花姑」という漢字の組み合わせは、花の霊そのままだ。「仙女」「仙子」は、女性の仙人の意味だが、かわいい植物の意にも使われる。「梅仙子」であり、「蘭仙女」である。妖精を想起させる小ぶりの花をつけるからであろう。どんな種類の梅か、どんな蘭か、一度は見てみたいもの。

たくさんの花が一斉に咲く。花のジュウタンのように。「百花斉放」は美の広がり。花の精「百花仙子」の誕生だ。

洋の東西を問わず、美しい女性には賞賛が集まる。均斉のとれた女性の美しさに見とれるとき、「花神」「花仙」が男性の心に侵入したのであろう。

やさしい眉を称えて「柳葉眉」。印象的な大きな瞳の「杏仁目」。おちょぼ口の「桜桃口」。中国は美しい女性の顔を次々と植物にたとえてきた。日本でもひとりの美女を3つの花にたとえてしまう有名なことわざがあ

る。「立てば芍薬しゃくやく、座れば牡丹ぼたん、歩く姿は百合ゆりの花」。

「花」に見とれていると、とり返しのつかない失敗もあるらしい。「走馬観花そうばかんか」という故事成語にこんな話がある。

ある青年がお見合いをし、相手の女性がひと目で気に入った。すみやかに婚礼を挙げ、迎えた初夜でショックを受けた。「花嫁に鼻がない」。あまりに低くて失望した。思い出した。見合いの時に花嫁は鼻に花をあてて嗅ぐ仕草をずっとしていたことを――

夢中になれば「痘痕あばたも醫えくぼ」。事前の調べを時間をかけて慎重に、という教訓が「走馬観花」にはある。さて花に見とれるのはこのあたりでやめて、花の世界に進入してみよう。「百花仙子」ももちろん女性。優しく迎えてくれる。

第2章 百花仙子の失脚

唐の則天武后（在位 690 ～ 705）は、「百花仙子」と交流ができたと伝えられている。権勢をほしいままにし、自ら帝位に就いた武后にとって、仙子との取引はたやすかったのであろう。

牡丹雪の降る冬の日、則天武后は「雪見」に出かけた。どこに行っても白一色。武后は満足できず、「百花」に「斉放」を命令した。「百花仙子」は緊急会議を開く。人間界の帝王から“内政干渉”された経験のない仙子たちは混乱した。「斉放」期限の朝が近づいた。仙子たちの主幹の牡丹仙子だけは武后の命令を断わろうと主張するが、ほかの花の仙子たちは武后に恐れを感じていたので、相次いで花を咲かせた。

白い雪一面に咲き乱れた百花の絶景。武后はしばらく見とれていていたが、百花の女王格の牡丹が欠けているのを見逃さなかった。「炭火で牡丹を焼き払え」。武后は即座に、お付きに指示した。牡丹という牡丹の葉が焼き払われた。枝という枝が焼き焦がされた。たまらず牡丹は、黒く焦げた枝から花を咲かせる。お膳立てが整ってから、主役は出るもののようである。白い雪